
茨城説話 ばらき土蜘蛛の伝承

遙 夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

茨城説話 ばらき土蜘蛛の伝承

【Zコード】

Z3405BA

【作者名】

遙 夏

【あらすじ】

茨城県のとある地域がほこる「茨城」という名の由来。

(前書き)

筆者が幼少のおり、古老人に口伝えられた地方民話を、解釈を交えて紹介する。

民話を語り継ぐ語り部のひとりとして、読んでくださったかたに、なんらかの発想を兆していただければ幸せである。

昔は、茨城県のあるあたりや常陸ひたちとか北下總とか言つたんだけん
ど、いま「ひたち」つつたら、日立製作所のほうの漢字で子ども
らは思うかしんねえな。

まあ、それはともかくよ、茨城いばらきつてのもちゃんと伝説に基づいた
れつきとした名前だかんよ。

茨城の土蜘蛛の話をしてもやつかんな。

* * *

筆者注
いはりき 茨城いばらきを茨城弁で茨城を発音すると、正確には「いばりき」である。

ただし、発音のみが「ぎ」と濁り、振り仮名は「いばりき」と振る
し、それが正解である。なお、茨城県民は「いばらき」と言つてい
るつもりでいる。他県民に「いばりき」と言わると憤慨する茨城
県民が多い。

本稿では、振り仮名をふる際、できつるかぎり発音どおりの表記
としたいが、本来は濁らなことにして明文化する。

* * *

いばらき 茨城には、いばらきだい 茨城台いばらきだい てつゝがつてよ、これが茨城県のもとの名
前だわ。

昔、茨城台のふもとあたりは、でつけえ集落があつたんだわ。

常陸の国の国分寺が見下ろせる台地でよ、霞ヶ浦もちけえ、筑波
山もちけえ、物がいつたりきたりすんのには、いい土地だつたんだ
つペな。

んでも、困つたことだ、あるとき茨城台にでつけえ穴っぽい空い
てるつづつて、集落のわけえ連中が見に行つてみつべつてなつたん

だと。したらば、誰ひとりとして帰つてこねえ。
なんかあつたにちげえねえ。

国分寺と国分尼寺をつくるのに、ずいぶん樹をきつたからよ、山の神が怒つたんだつべという話になつたんだわなあ。

んだけんと、おんなしように樹を切つた、筑波の山の神さまは怒つてねえんだわ。国分寺のはしらにする分だけじゃなくつてよ、筑波山のほうは、瓦を焼くための木も切つたのに、特に怒つてゐる氣配もねえ。

したら、おかしい話だつてなつたつべなあ。

なにか居んだつべ、おつかねえ獸がいんだつべ、つつて噂になつて誰もちかよらねえようにしたんだあ。

んだども、だめだ。

今度は、集落のわけえのが、どんどん攫われるようさなつちまつた。

わけえのだけでねえくて、どつも子どもも多く攫われたようだつたんだ。

また噂んなつてよ、夜さなつたら茨城台のほうから脚のたくさんあるのが這い駆けしてきた、穴ぼこから黒いけむくじやらが出てきて攫つていつた、つつて、集落は、ほとほと困りはてたんだわ。

んでは、しかたあんめ。腕つ節の強いのに退治してもううしかねえわ。

山で鹿を獲る狩人と、湖で魚を捕る漁師と、国分寺の衛兵と、この三人に、村長は嘆いて頼んだんだ。

んで、弓もち、鉤もち、剣もち、三人は台地の穴っぽい田指していつたど。

薄暗い穴んなか、じつと目をこらして様子をみたんだあ。

したらば、それみたことが、でつけえ蜘蛛が何匹もいて、肝がちやぶれる心地がしたんだわ。

暗くてよくは見えねえど? けんど、よくよく見たら、人の骨が転がつてよ、人を食つてたんだつてのが分かつたんだつべ。

なるほど敵の正体が分かつた、つって、三人は集落にもどつて、やつつける方法を考えたんだ。

集落の堀や柵が役にたたねえからよ、獵師は網でとらえつべと言い出して、狩人は目を遠くから狙い打つんだと言い張つた。

んで、その夜。

腹をすかした大蜘蛛が集落の堀を駆けて、柵をよじ登つてきた音がした。

それつ、と、獵師が網を放つて、狩人が矢を放つて、んだけんとが、相手は脚がたくさんあつペ？

ぜんぶ避けられつちまつ。

おかげでその日は誰も攫われねがつたんだけんと、追い払つただけで、三人は負けたような気分だつたんだわなあ。

国分寺の衛兵が、これではダメだと頭をひねつたんだわ。
んだつてよ、巣穴にはうじや こらいたんだつペ？

一匹しかこねえもの、一匹だけ退治したつて、また次のが来たら、ずつと戦い続けなきやなんねえ。

そこで名案が閃いたんだあ。

獵師は、なんとかかんとか次の日の夕暮れまでに間に合わせて、三人一緒に、またあの薄気味悪い穴っぽこさやつてきた。

その穴っぽこの入り口さ、茨で編んだチクチクする柵をおいて封じ込めちまつたんだ。

んで、国分寺の衛兵は火をたいてよ、蜘蛛どもを煙でいぶして穴から誘い出すわな。

そこへ、真つ赤な目をした蜘蛛が殺到すると、目ん玉を繰り抜くように狩人の矢があられと降つてくるわけだ。

茨城つてのは、この茨で編んだ柵のことだあ。

最後に、剣で蜘蛛の頭を切り落とした時に使つた剣を、天にも届く「雲霧のつるぎ」と呼んで集落の宝物になつたんだつう話だわ。

* * * *

【筆者解説】

人食い蜘蛛、大蜘蛛。ファンタジーの世界にはありがちな強敵と言えるが、あえて土に穴をほつて暮らす蜘蛛であるところにこの話の絶妙さがある。この蜘蛛は、網を張つて待ち構えるのではなく、むしろ逆に、網にとらわれる存在なのである。しかも、これまたファンタジックなキーワードであるが、わざわざイバラをもつて網にしているあたり、相手が巣穴住まいでなければ使えない策略であるあたり、民話の構成として巧妙である。

大昔のことであるから、解釈は想像によるしかない。しかし、節足動物は、陸上で生活できる大きさは限られており「肝をちやぶす（肝をつぶす）」ような大きな人食い蜘蛛は、気圧のある陸上では存在しない。当然的に、人間であると推測することとなる。

たとえば、ヤマトタケルはクマソタケルを退治するところからヤマトタケルと名乗るようになるという話がある。完全に動物寓話にしてしまえば、これは熊退治で描くことができるというものだ。

このクモ退治も、なんらかの旧部族と新政権を意味していると考えられる。茨城県であるから、その時代は蝦夷が原住民としていただろう。

やまと言葉の「ク」の音は、たいがい「暗い」と意味のつながりを示している。新政権側が「クモ」と呼んだのであれば、暗愚たる原住民がいたということである。クマも、本来は「熊」というよりは「隈」であろうし、やまと言葉で考えると、クモも「蜘蛛」そのものよりもむしろ「曇り」のほうが連想される。集落に暗い影を落

とすクモである。

何かのきっかけで、人肉を食らうことを見えた洞窟式住居の原住民と思うと、毛むくじらであったのは獸の皮を衣服としたからだろうと、さらに想像がつながっていく。茨城県以北は、それほど隆盛な文化現象ではないものの、古代には貧しくなれば人肉を食うことがあつたし、伝統として、敵対する者の肉を食うことは「己を強めることとなる」という呪術的な雰囲気ももつている。

ところで、筑波山の狩人、霞ヶ浦の獵師、国分寺の衛視、というパーティの組み方も、地域に根ざしていて独特であるし、なお、それぞれにそれなりの活躍の機会が与えられているのが痛快である。

誰かひとりでも欠けたら、このストーリーは成立したかどうか。それは、ただどう。

しかし、たつたひとりの英雄でことを解決するのではなく、失敗をしながらもそこから考えて課題を突破しようと言つ意思があるようと思える。

それぞれの特性を生かす強みを、ばらき伝承はほんのりと伝えているように感じられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3405ba/>

茨城説話 ばらき土蜘蛛の伝承

2012年1月8日22時52分発行